

6. その他のバイオマス

6-2. 地域における原材料の量の把握

6-2-2. もみがら

もみがらについては、畜舎敷き料として用いられている（農水省推定では、208万トンのうち88万トンが畜舎敷き料）が、稲わらよりはバイオマスで利用できる割合が多いと推定される。ただし、利用可能量のばらつきが大きい。ここでは、経済産業省推定と、農水省推定（焼却に回されている分）の中間の割合、20.9%とする（27.9%と13.9%の中間値）。

1996年の日本の米の生産量は、15,700,000トンである。稲わらの発生量は農水省推定値の955万トンを使用した。

$$9,550,000 \text{ トン} / 15,700,000 \text{ トン} = \text{米生産トン当たり稲わら率} = 0.608$$

各地域での米の生産量 $\times 0.608$ = 稲わらの発生量

実際に利用できる量 = 稲わらの発生量 $\times 0.10$

同様にもみ殻の発生量は208万トンである。

$$2,080,000 \text{ トン} / 15,700,000 \text{ トン} = \text{米生産トン当たりもみがら率} = 0.132$$

各地域での米の生産量 $\times 0.132$ = もみがらの発生量

実際に利用できる量 = もみがらの発生量 $\times 0.209$